

## 学外研究制度成果報告書

2014年 9月 26日

立命館大学長 殿

所属： 文 学部/研究科 職名： 教授 氏名： 山本博樹 印

このたび学外研究を終了しましたので、下記のとおり報告いたします。

研究課題	少子高齢化地域で生き抜く高校生の学習支援研究—支援ニーズの把握—			
研究期間	2014年 4月 1日 ～ 2014年 9月 25日 ( 6ヵ月間)			
滞在先国名 (複数ある場合は 全て記入してく ださい)	日本	<input type="checkbox"/> 国外のみ <input checked="" type="checkbox"/> 国内のみ <input type="checkbox"/> 国内__ヵ月、国外__ヵ月		
研究日程 概要	期 間	滞 在 都 市 名	研 究 機 関 名	
	①	2014年 4月 ～ 2014年 9月	京都市	「自宅」
	②	年 月 ～ 年 月		
	③	年 月 ～ 年 月		
	④	年 月 ～ 年 月		
	⑤	年 月 ～ 年 月		
⑥	年 月 ～ 年 月			
1. 実施概要：研究方法や、上記研究日程に即して実施した概要を記述してください。				
<p>本研究では、これまでの学習支援研究の成果を踏まえて、少子高齢化社会の中で生き抜く児童生徒の支援ニーズを把握し、有効な支援のあり方を検討することを目的とした。わけても、その支援ニーズの把握過程に重点を置いた。理由は、学習支援研究では、児童生徒の要請する支援ニーズの把握から開始されることがポイントであるにもかかわらず、児童生徒の「いま、ここで (now and here)」の支援ニーズに視点を奪われてしまい、来るべき少子高齢化時代に対応した支援ニーズを把握しきれていないためである。そこで、2014年度の前期間を通して、本研究の課題を遂行するために、以下の3点を実施した。</p> <p>1) 当該領域の先行研究に関する理論的検討 (4月)        学習支援研究の立場から、少子高齢化社会の中で生き抜く高校生の学習支援を行うにあたり、始発点となる支援ニーズを導出することを目的として、理論的検討を行った。その結果、学力低下の問題が明らかになり、その基礎にある読解困難性を支援ニーズとして導出することができた。</p> <p>2) 関連調査の実施とデータの分析 (5月～8月)        本研究は、仮説検証型ではなく仮説探索型であり、仮説構築を目指すことが目的であるため、定性的な方法を採用することとし、主にインタビュー調査を通じてデータを収集した。自宅を拠点としながら、石川県と京都府を事例として、教育機関 (小学校・中学校・高校・大学や教育委員会) や施設 (児童相談所や高齢者施設) を適宜訪問した。この際、金沢大学教育学部や金沢医科大学看護学部より協力を得た。また、並行して、関連するデータの分析を行った。</p> <p>3) 本研究課題に関する公表の準備と発表 (9月)        前期期間中に2本の投稿論文を準備した。また、3件の学会発表に関する準備を行うとともに、発表を通じて本研究課題の重要性を説明した。</p>				

**2. 研究成果の概要**：研究成果について、概要を記入してください。

学習支援研究では、児童生徒の要請する支援ニーズの把握を始発点とする。ところがこれまで、児童生徒の「いま、ここで (now and here)」の支援ニーズに視点を奪われてしまい、来るべき少子高齢化時代に対応した支援ニーズを把握しきれておらず、学習支援が遅れている。この解消には、少子高齢化社会の中で生き抜く高校生が要請する支援ニーズを把握し、有効な学習支援のあり方を検討する必要がある。また、これにより、今後少子高齢化がすすむ国内での学習支援の足場を築くことができると考えられる。そこで、本研究では、以下の3点を目指した。それらは、1) 少子高齢化社会で生きる高校生の学習面での支援ニーズの導出、2) 高校生の支援ニーズにもとづく支援対象の同定、3) 支援対象に対して有効な支援方法の提案、である。以下で研究成果を述べたい。

## 1) 高校生の学習面での支援ニーズの導出

理論的検討や関連調査を経て、少子高齢化地域で生きる児童生徒の様々な困難性が見えてきた。それらは、学習面ばかりでなく、心理・社会面、健康面、進路面など、多岐に及ぶが、本研究では高校生の学習面に焦点化した。そこで浮かび上がった特徴的な問題は同地域における高校生の学力の異常低下であり、そこには読解力低下問題が深く関わっていることが示唆された。つまり、無秩序のテキストを機械的に読みこむのではなく、整合性のあるテキストから意味を受け取る過程での困難性である。こうした読解力低下問題は、国語科のみの問題ではならず、すべての教科に及んでいるから、これを支援ニーズとすることは妥当と考えた。中でも、「教科書を」教える傾向が強い公民科「倫理」では、その影響を強く受ける。高校生からは、「先哲の思想形成の流れが捉えにくい」や「全体のつながりが分かりにくい」という実感が聞かれたためである。これは、下述するように、「倫理」教科書が、諸学説の概要集であることが深く関係しているためと考えられるが、これを学習支援研究を始発するための支援ニーズとして導出することにした。

## 2) 支援ニーズにもとづいた支援対象の同定

もとより、高校生は、「倫理」の理解困難性を教科書に帰属させがちであると言われている。公民科「現代社会」や「政経」では、生徒が自身の知識不足を理解困難性の理由としているのに対して、「倫理」では「教科書」に帰属させる者が多いという結果からである(山本, 2014)。また、「倫理」の理解困難性を教科書に帰属した者について検討してみると、6割近くが読解時の体制化過程の困難性(概念間の関係を構築する際の困難性)に帰属していることも示された。これは、先の「先哲の思想形成の流れが捉えにくい」や「全体のつながりが分かりにくい」という高校生の実感に合致していると考えられる。本研究では、「倫理」教科書が doxography という独自のスタイルをとる点に着目した。これは、諸学説の概要集を意味するから、この理解では概要把握に関わると考えることで、概要の捉えにくさを訴える上記の高校生の実感は解釈できる。よって高校「倫理」教科書の概要把握を支援対象として同定できると考えた。もちろん、この支援対象は少子高齢化地域の高校生にのみ該当するものではなく、高校生全般に該当する。ただ、少子高齢化地域でみられる読解力低下問題の深刻さは他地域を凌駕する故に、この支援対象を学習支援研究の目標として定めていくことは意義深いと考えられた。

## 3) 有効な支援方法の提案

学習支援研究では、情動的支援の提供が主となるが、これは主に説明表現の提供を指す。「倫理」教科書の概要把握を支援では、分かりやすい概説表現の提供となる。そこで、記述型概説に替えて順序型概説を採用した場合に、その理解度の増減がどう変わるかを分析したところ、高校生は減少者が多く増加者が少ない一方で、大学生は減少者が少なく増加者が多いという逆の結果となった。ここからすると、もし深刻な読解力低下問題を抱える少子高齢化地域に生きる高校生に、概説表現を工夫しても、彼らの読解力低下問題ゆえに支援が無効になる場合が出てくると考えられる。読解力の異常低下問題が支援の受給にまで影響すると考えられた次第である。

上記より導き出された仮説をステップとして、今後は、少子高齢化対策が求められる日本の高校生に対して有効な学習支援のあり方を検討したいと考えている。なお、本研究は、以下のように3件の学会発表としてすでに発表済みである(以下にタイトルを記す)。また、2本の投稿論文(投稿中)を通じて、公表の予定である。

## [学会発表]

山本博樹(2014). 高校生への「倫理」教科書の学習に対する支援は有効かー支援の恩恵を受け取る高校生ー  
日本学校心理士会 2014 年度大会発表論文集.

山本博樹・吉田甫・孫琴・増本康平・金城光・古橋啓介・佐藤眞一(2014). 学習支援研究がひらく豊かな生涯ーいかに高齢者の記憶支援を自立支援へとつなげるかー 日本心理学会第 78 回大会発表論文集.

山本博樹・織田涼(2014). いかに未熟達な読み手が読解過程で見出しの恩恵を受けるかー PC を用いた時系列的な評価ー 日本心理学会第 78 回大会発表論文集.

氏名	山本博樹
----	------